

## 読書が困難となった症例に対する介入 - 第一報 視空間性ワーキングメモリに着目して-

○小倉 亮<sup>1)</sup> 藤原 瑤平<sup>1)</sup> 河野 正志<sup>1)</sup> 市村 幸盛<sup>1)</sup>

1) 医療法人穂翔会 村田病院 リハビリテーション部

### 【はじめに】

読書は他者からの介助や援助を受けにくい行為の一つである。今回、読書が困難となった症例に本報告では視空間性ワーキングメモリ (WM)，第二報では言語性短期記憶における音韻表象の保持に着目して段階的に介入し良好な結果を得たため報告する。

### 【倫理的配慮】

症例に本報告に対する趣旨と内容について説明し同意を得た。

### 【症例紹介】

60歳代男性であり、右放線冠，左頭頂葉を中心に広がる心原性脳塞栓症を発症したが，身体機能障害は認めなかった。発症30日後の高次脳機能障害は，視空間性WM，言語性短期記憶障害を認めた。読書時に「どこを読んでいるのかがわからなくなる」との記述が聞かれ，同じページを幾度も読み返していた。

### 【評価】

Visuospatial working memory task (VWMT) は，7割程度の正答率であった。BIT行動性無視検査 (BIT) の文字抹消試験は497秒要し，行飛ばしや同じ行を視覚走査する様子が観察された。BITの音読課題においても同様の現象が観察され191秒要したが，段落をなくし一行にすることで159秒で音読可能となった。両条件ともに内容の把握は困難であった。

### 【病態解釈と介入指針】

上記の現象は，視空間性WMの低下により，他行を抑制しながら読み進める行にのみ注意を焦点化させることや，既に読んだ行を保持した上で次行に移ることが困難であるためと考えた。また，言語性の短期記憶障害により長文の読解が困難であり内容の把握ができず，読書に支障をきたしていると考えられた。そのため，まずは文章を視覚的に適切に捉えることが必要であると考え，視覚情報の負荷量を段階的に上げながら視空間性WMの改善を図ることを目的とし，pointing span課題やタブレットパネルの視覚識別課題等を2週間実施した。

### 【結果】

VWMTは9割程度の正答率となり，文字抹消試験は281秒となり，行飛ばしや同じ行を視覚走査する様子は消失した。音読課題では通常132秒，段落なしの音読で126秒と解離が減少したが，内容の把握は困難であり実用的な読書には至らなかった。

### 【考察】

読書において視覚処理速度は読解速度に依存するとされているが，本症例は視覚情報が多くなると文章を適切に捉えるという前段階でのエラーが生じており，その要因として考えられた視空間性WMの改善を図ったことで視覚処理速度の向上に繋がったと考えられた。